

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12245

研究課題名（和文）ビザンティン美術「聖母の眠り」図の辺境における展開と装飾プログラム論について

研究課題名（英文）On the Development of the image of the Dormition of the Virgin and its decoration program in the Byzantine Periphery

研究代表者

武田 一文（Takeda, Kazufumi）

筑波大学・芸術系・助教

研究者番号：90801796

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ビザンティン美術の主要な主題の一つである「聖母の眠り」図像が聖堂装飾としてどのような位置付けにあるのかを再検討した。特に帝国の辺境域において特色があるとの仮定のもと、フィールドワークを実施し、写真資料の収集と聖堂内の状況について調査を行った。その結果を基に、ジョージア、ロシア、カッパドキアといった地域に遺る図像について研究発表及び論文執筆を行った。聖堂内の図像配置や「眠り」図像には中央とは異なる特徴を見出すことが出来、帝国辺境域における情報の隔絶の結果であると推察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世キリスト教美術、その中でもビザンティン美術の壁画装飾は、未だ出版も多くなく、図像そのものへのアクセスが容易でない。そのため、現地のフィールドワークを基にした地域横断的な装飾研究は海外の研究者に対してもインパクトのあるものである。また、本邦において認知度が高いと言えない正教とその基盤たる東欧諸国の文化について、ビジュアル・イメージを基に理解を促進する役割も果たすと期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, I reexamined the meaning of the image of "Dormition of the Virgin", one of the main subjects of Byzantine art, as a church decoration. Based on the presumption that it is particularly distinctive in the periphery regions of the empire, fieldwork was conducted to collect photographic materials and investigate the conditions inside churches. Based on the results, I presented my research and wrote papers on iconography in Georgia, Russia, and Cappadocia. We found that the iconographic character of the images in churches differed from those in the center of the empire, and I speculated that this resulted from the isolation of information in the periphery regions of the empire.

研究分野：中世キリスト教美術

キーワード：ビザンティン美術 聖母の眠り図像 聖堂装飾プログラム

1. 研究開始当初の背景

正教の聖堂はその内壁を壁画で埋め尽くすことを常とする。ビザンティン美術の中でも聖堂装飾は、地域ごとの研究や、聖堂内での図像配置における規則、図像同士の連関により生み出される意味を考える聖堂装飾プログラム研究が為されてきたが、近年は新知見に乏しい。また主題毎の個別研究は未だ盛んでない。地域、時代とも広範に及んだビザンティン帝国内にあっては、往時の殆どが喪われたとは言え未だ遺る聖堂数も膨大であり、主題という観点から論ずるには困難が伴う。単に聖堂を訪問する困難さもさることながら、東欧・トルコなどに多い聖堂は出版状況から図像へのアクセスが難しく、また西欧の研究者、現地の研究者とも、歴史的・政治的・宗教的背景が国家横断的なフィールドワークを難しくするという。また、筆者が研究対象とする「聖母の眠り」図像は現存最初期(7~10世紀頃)の作例を除くと、ほぼ構図は定型化され、以降現代に至るまで大きな変化を生んでいない。以上のような状況から先行研究の深まりを見ていないのが現状である。

しかし聖堂装飾プログラムはビザンティン人が、信仰をいかにヴィジュアルな形で表象しようと苦心したのかを示すものであり、それは聖堂内の図像を個々に切り出して見ても理解できるものではない。そして「聖母の眠り」は、聖母マリアの最も重要な祝祭でありその図像は聖堂装飾プログラムにおける一つの大きな軸となっている。筆者は「眠り」図像がいかに聖堂内の軸となっているかを明らかにしてきたが、その軸が帝国の辺境ではどう維持、あるいは変化したかが大きな問いとなる。

2. 研究の目的

先の問いについて、辺境地域では中央との断絶があったことが示唆される。例えばカッパドキアでは、1071年のマラズギルトの戦いによってアナトリア地方がセルジुक朝の支配下となったが、実際の人的・物的交流がビザンティン帝国との間に失われたのかは議論がある。しかし筆者のカッパドキアにおける調査は、中央の情報(図像の「型」)が11世紀後半以降伝わらなくなったことを示していた。このような文献史料のみでは知ることができない、当時の中央と辺境における繋がりや断絶を「聖母の眠り」図像の図像学的解釈から明らかにすることが目的とした。同時に「聖母の眠り」図は聖堂内の重要な図像であるとは見做されながら、装飾プログラムの解釈は新知見が提供されていない現状を打破することも目指した。

3. 研究の方法

筆者のこれまでの研究を踏まえ、本研究ではギリシア・クレタ島とトルコ・カッパドキアをフィールドとして「聖母の眠り」図像の調査を計画した。2地域はいずれも筆者が過去に論文の対象としたものであり、その発展的研究を目指す。クレタでは現地聖堂の悉皆調査を行っているギリシア人研究者の著書を基盤としたため、「聖母の眠り」の図像自体は殆ど収集できていない。カッパドキアは、未踏聖堂の更なる調査も合わせて実施したいと考えた。以上の研究により、筆者がこれまで調査したジョージア、ロシアと合わせて辺境地域の図像の有り様を整理し、「聖母の眠り」図を軸とした「聖堂装飾プログラム論」を考察し、さらには帝国の辺境地域における歴史的状況にも光を当てることを目的とした。

カッパドキア、クレタはビザンティン帝国における「辺境」であった。そのため、通例と違う聖堂内での配置や(中心都市であったコンスタンティノポリス、テサロニキなどの他地域に遺る聖堂では本堂西壁を定位置とするが、それが守られない)、より古い構図が保存される傾向が見られる。クレタ、カッパドキアとも地域的な先行研究はあるが、一主題に絞った考察は為されていない。その点で他地域の図像資料を数多く収集し、比較考察を行うことで地域の特異性を指摘できることが予想される筆者の研究は独創的な位置にある。また、クレタとカッパドキアは「辺境」という地域性は共有するものの、一方は島、一方は岩石砂漠という地理的条件の違い、現代に至るまでギリシア人が住み続け正教が奉じられていたクレタと、12世紀以降ムスリムの強い影響下に置かれ聖堂の建築も下火になったカッパドキアという歴史的条件的違いが存在する。これら諸条件に注視しつつ図像の変化、展開を考えることで、上述したマラズギルト前後の変化など、文字史料に表れない人々の動向すら読み取ることが可能になると考えた。

4. 研究成果

まず当初研究予定からの変更点として、COVID-19の影響により、補助期間を延長したものの十分な海外調査時間を得ることが出来なかった。そのため、調査はトルコ・カッパドキアで集中的に実施することとし、得られた資料を基に研究を行った。併せて、筆者がこれまでの調査で収集したロシア、ジョージア地域の写真資料を基に、「聖母の眠り」図像の辺境における特質について研究を行った。なおロシアの聖堂装飾は、中期の装飾プログラムを考慮する上でジョージアと共に重要なものであり、本研究あるいは継続的に実施する研究によって再度調査をすべきであると考えていたが、国際情勢の変化により当面実施が困難となった。

ジョージア、特にスヴァネティ地方の聖堂において、以下の点で「聖母の眠り」図像に留まらない特異な点について明らかにすることができた。

(1)アプシス・ドームの「デイシス」図像の頻出、(2)壁画主題の選択における小聖堂での大画面の使用、(3)「聖母の眠り」の少なさ、(4)聖人立像の少なさ、である。(1)について、辺境にお

いてアプシスに「デイシス」が頻出することは既に指摘されているが、スヴァネティは他の辺境と比較してもその割合が大きい。(2)について、キプロスなどでは小聖堂は壁面を細かく区切りある程度多くの主題を描こうとするが、スヴァネティではより個々の主題での大画面を志向する。(3)について、辺境では十二大祭の一つであるにも関わらず「眠り」図像の描かれる頻度が少ないことは既に筆者も確認していたが、スヴァネティではよりその傾向が強い。(4)について、聖人立像は信徒とのコンタクトを志向するものとして正教聖堂では重要な位置にあるが、ややその数が少ない。

以上のように、ビザンティン聖堂の定型と比較するとスヴァネティ地方の聖堂は幾つかの差異を持つ。これまでビザンティン島嶼部や辺境部は「辺境」という大きな枠組みを持って捉えられてきたが、ジョージアの聖堂装飾プログラムは、カッパドキアやクレタとも、ロシアとも異なる独自の様相を持つ可能性があることを指摘できた。

カッパドキアについては、過去訪問した聖堂の再訪、加えて新たな聖堂での資料収集により、これまでの研究を深化することができた。特に「眠り」図の新たな資料を得たことで、図像の構図、加えて聖堂内の配置に、聖堂装飾プログラムとしてより古い「型」を維持しているとの筆者の説により説得力を持たせることになったと考えている。

資料収集という点では、筆者の調査期間においてもカッパドキアの聖堂は劣化を見せており、出来るだけ多くの記録を残すことがデジタルデータとはいえ聖堂の「保存」に繋がるものと考えられ、意義ある成果であると共に今後も継続していくべき作業であると言える。

以上の成果は、ビザンティン聖堂装飾が単に型を踏襲するだけの保守的なものでは無く、時代・地域による変化を見せることの一例を示した。また現代において様々な国・地域に点在するビザンティン美術の、国境に囚われない横断的な視点が求められることを改めて明らかにし、日本人としての筆者ならではの研究成果を提示できたものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 武田 一文	4. 巻 9
2. 論文標題 聖堂装飾における十二使徒の選択に関する一考察 典拠と神学的重要性の相克に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 109-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武田 一文	4. 巻 37
2. 論文標題 中世ジョージア聖堂装飾におけるスヴァネティ地方の作例について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 藝叢	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武田 一文	4. 巻 8
2. 論文標題 カッパドキアの聖堂装飾における「聖母の眠り」図像再考 聖堂内配置と周辺の聖母伝図像に着目してー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 107-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武田 一文
2. 発表標題 中世ジョージアおよびロシアのキリスト教聖堂における装飾プログラムの特質について
3. 学会等名 筑波大学芸術学美術史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武田 一文
2. 発表標題 ジョージアの中世聖堂壁画における主題選択と配置についての一試論 ビザンティン辺境の装飾プログラムの一例として
3. 学会等名 ビザンティン図像学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武田 一文
2. 発表標題 「ボロシュキ修道院主聖堂（北マケドニア）における「聖母の眠り」図像の特殊性について」
3. 学会等名 早稲田大学美術史学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武田 一文
2. 発表標題 東方教会における「聖母の眠り」の図像表現について ビザンティン聖堂の現存作例を中心に
3. 学会等名 研究会「聖母の死」図像の東西」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------